夢童

ハイチ復興支援の鍵は"団結力"

菅波　茂

1月12日、11万人以上の死者と220万人に及ぶ被災者を出した大地震がハイチの首都ポルトープランス近郊で発生。前代未聞の救援活動となった。

統治機構の崩壊により、治安の維持、水、電気、通信など社会インフラ、そして民間団体の受け入れなどが不可能となった。4000人の武器を持った脱獄囚人に加えて、前アリスティド大統領が一斉蜂起を期待して市民に配ったが回収されていない銃器。その回収と治安を目的とした国連ハイチ安定化ミッションも大きな被害を受けた。豊富な救援物資がありながら、配布システムの不備が招いた格差。大きなビルほど死臭がひどいがれきの街。40万人の郊外移住計画に必要な20万個のテント。誰がどこから搬送するのか。

1月15日、AMDAは日本から第一陣をドミニカ共和国の首都サントドミンゴ経由でハイチに派遣。2月1日までに合計18人を派遣している。岡山本部、カナダ、コロンビア、ペルー、ネパールの各支部からの医療スタッフ派遣に加えて、ボリビア、インド両支部の医療チームが待機している。ハイチ国内でAMDA医療チームを受け入れてくれたのは、カナダ支部から紹介された非営利団体CECIである。ポルトープランスの北西90キロにある都市サンマルクに活動拠点を持っている。

1月22日には、サンマルクに米軍の保護下にある米国の医療スタッフと救援物資が大量に入ってきたことから、AMDA医療チームはさらに北に40キロ地点のゴナイブに開設された国連管轄地域医療施設へと移動した。そこでは警護、宿舎そして食事などが提供された。最適な活動拠点である。日本を出発する前、軍の保護のないAMDAは、ハイチ国内では国連軍に保護されている国連管轄地域内とドミニカ共和国国境地帯の医療機関を拠点にすることを考えていた。

1月21日、私はドミニカ共和国に入国した。政府の統治機構が崩壊したハイチでの救援医療は、"出口のない人道支援"になる可能性が高い。今後の方針の決定のためだった。治安を確保して必要な医療を提供できるのか。ハイチ国内か、国境地帯か。緊急対応医療か、一般医療か。国境にある人口1万人の町ヒマニの病院を視察した。各国の医療チームが活動していた。ロシアからとおぼしきチームも街を歩いていた。サントドミンゴでは日本大使館、JICA事務所、そしてドミニカ日系移民協会を訪問して助言をいただいた。

1月23日にハイチ国内の医療内容が変わった。整形外科手術により、下肢を切断した患者に必要な義肢が求められ始めた。国境地帯のヒマニ公立病院に、義肢センターを置くことを決めた。下腿を失って歩けない患者は、ハイチでは究極の社会弱者になるおそれが高いからである。

ハイチ復興支援の鍵は人々の団結力にある。それは医学を超えている。ドミニカ共和国は「野球天国」であり、ハイチのスポーツは野球とサッカーである。ドミニカ共和国には、1990年に設立されて以来、日本野球界に人材を提供している広島カープの野球アカデミーがある。ドミニカ日系移民協会と協議の上、少年や社会人野球交流推進によりハイチの復興支援を後押しすることに決定した。

政策提言をしたい。カープのある広島県と国際貢献推進条例のある岡山県の両知事が、道州制を念頭に置いた両県民の融和のために、少年野球チームをドミニカ共和国に派遣してはどうだろうか。さらには、台湾、韓国からも少年野球チームを派遣してはどうか。「ハイチ復興支援！　野球交流推進」は東アジア共同体推進への布石になる可能性もある。大きな破壊は大きな創造への第一歩とは、ヒンズー教のシバ神の示唆である。誇大妄想だろうか。

（AMDAグループ代表）